リビング・ゴースト
1
著・イラストレーション
エイジ
憑依
成仏無用
無霊退散

リビング・ゴースト 1

The Living Ghost

エイジ

エピソード1　再会

「さあ、帰ろ……」

いつものように丸一日退屈な授業が終わって、おウチに帰る。そんな変わらない毎日。今日も特にワクワクすることも無く、ヒヤヒヤすることもなく、ただ毎朝歯を磨くのと同じように、あたりまえのことをあたりまえに消化していく毎日。

ロック好きで、とても明朗快活とは言えないダルい感じの16歳の少女レイ。毎日つまんないことばっかりで何をするにもやる気が湧いてこない。

最近覚えた言葉ではモチベーションっていうんだろうか……勉強にしろ、スポーツにしろ、恋愛にしろ、とにかくそういうのに全く燃えない。

そんな力一杯無気力なレイにとっての楽しみと言えば、家に帰って大好きなバンドの曲を聴きまくること。ライブに出掛けること。大好きなファッションで全身を固めること。

この3つが揃っていれば満足度80％で、そこそこご機嫌な笑顔をまわりの皆様にご覧いただけるという感じだ。

ちなみに好きな音楽は高速でノイジーなパンク、一部のメタル、どっぷり暗いゴス系。好きなファッションは基本パンク、そこにちょこっとゴスなスパイスを効かせるという、理解できる大人がえらく少ないであろうと思われる特殊なカテゴリーだ。

鋲、スカル、黒づくめ、破れたジーンズにマーチンのブーツ……。

まさに、絵に描いたように反社会的ないでたちだ。こんな格好をしたヤツがバイト出来るのは、せいぜいティッシュ配りか、楽器屋の店員ぐらいなものだろう。

そして、残すもう一個楽しみというのが、実はオカルトなのである。

オカルト趣味と一言で言っても、幽霊やら妖怪やら魔術やら、呪いやら色々あるのだが、レイのオカルト趣味はさほどマニアックでは無く、例えば、深夜に一人で読むネットの怪談話にガクブルすること、心霊写真に写った霊を「どこに写ってんだよ！」ってムキになって探すこと、コックリさんにいろいろ質問すること程度のカワイイものだった。

コックリさんは小学生の頃クラスメートが良く2～3人でやったりするのが流行ったが、それじゃ個人的な内緒にしておきたい質問は出来ないので、あんまり参加する気がなかった。

でも、実のところ参加しなかったのはクラスメートとなかなか打ち解けられない人見知りな性格だったので「アタシも混ぜて～」っていうのが、ずっとできなかっただけというオチだ。

その子供時代に消化しきれなかった反動もあってか今頃になって「ダセェ～子供かよ……」とか思いつつ、深夜に一人でコックリさんという状況になっているのかもしれない。

しかし、高校生になってからのオカルト趣味はこっそりと楽しみたい趣味ベストテンで結構上位に食い込むのではないだろうか…。

なおかつ、レイみたいなロック大好きなタイプがオカルトとか――ましてや、コックリさんって、正直誰にも知られたくないものである。

そんな歯がゆい違和感を抱えつつ、今日も相変わらず深夜一人きりで、怪談話にドキドキし、ちょっとした物音に背筋をこわばらせ、心霊写真の隅々にまで目を走らせ、コックリさんとの会話を楽しんでいるのである。

ちなみにレイの使っているコックリさんのセットは五十音の文字や鳥居やらを書き込んだ紙と十円玉なんてことはなく、ネット通販で買ったゴツイ木製の輸入品である。

輸入品であるがゆえ、書いてある文字は当然ひらがな五十音ではなく、すべてアルファベットのみだ。少々不便なところはあるが、この重厚感と高級感から漂うヤバそうな雰囲気がレイのお気に入りだった。

十円玉の代わりとなるブランシェット（指示器）も木製で、形は丁度ハートマークを逆さまにした感じで、その中央やや上あたりに穴があいている。

占うとき、この穴にコックリさんの選んだボード上のアルファベット一文字がまるく収まる格好だ。

この高級で、ご大層な、本格的なコックリさんセットで、学校のこと、男の子のこと、進路

のこと、将来のこと、明日のお天気から晩ご飯のおかずまでいろんなことを訊いているわけだが、どんな質問をしても、このヤバそうな雰囲気に似つかわしくないグダグダな答えがでるばかり。「ＷＡＫＡＲＡＮＡＩ（わからない）」「ＳＩＲＡＮＡＩ（しらない）」「ＤＯＵＤＥＭＯＩＩ（どうでもいい）」、こんな具合である。

このグダグダな答えが、日頃モチベーションがあがらない一因となっているような気がしてきてだんだんムカムカしてきた。

今日という今日は、もういい加減ウザさが頂点に達して来たので、眠りにつく前に一つバカな質問をしてから、とっととコックリさんにはお帰りいただこうと、こんなことを訊いてみた。

また、グダグダな答えが出たら明日からしばらくの間はコックリさんにはお休みいただくことにするつもりだ。

そしてレイはそのとびっきりバカな質問をしてみた。

「アタシ、超カッコイイバンドのボーカルになれますか？」――ブランシェットがゆっくりと動き出す。

――どうせ、適当な答えだすんだろ。ハイ、ハイ。――

全くの期待感もなく無気力に指先のブランシェトの見つめていたその時、行方がいつもと違う事に気づいた。

――えっ！　滑っていく方向が違う。――

ゆるゆると目的の場所にたどり着いたブランシェットの先が指し示した答えは「ＹＥＳ」。

「えっウソ！　マジで！」

レイは興奮したその瞬間についうっかりブランシェット（指示器）から指を離しまう。

「……うわ……やっちゃった！　祟られる！」

レイはうれしい結果に舞い上がりながらも、昔コックリさんをやっていたコが、十円玉から指を離した後、狐か何かの低級霊に取り付かれてオカシクなったなんて怖い話を思い出してどうしていいのか訳がわからず激しく動揺した。

――だ、大丈夫――大丈夫、迷信迷信――　。

と、冷たい汗をかきながら無理矢理、恐怖心を必死で押さえ込もうとしていた。

普段オカルト話はマジに信じているクセに、こんな時に限って迷信だなんて、全く自分のご都合主義には呆れたものだ。

でもそう思い込むしか、この状況で気持ちを落ち着かせる術はなかったのである。

レイは折り目正しく固まったままの状態で、机の上の文字盤にスカルが描かれた黒い置き時計を見つめた。時計は最悪のイベントへのカウントダウンかのようにカチコチとゆっくり時を刻み、数分が過ぎた。

「ふう……、ほら何にも無いじゃん。大丈夫、大丈夫」

ようやく緊張の糸が弛み、恐怖心が消え去ろうとした瞬間、レイは背後に何やらおぞましい

気配を感じ、反射的に振り返った。

「――ウ、ウソ……」

振り返った先には信じ難い現象起こっていた。部屋の隅の一角、ベットの上で煙のような雲のようなモヤモヤした闇のようなものが立ちこめ初めていた。

それは、なんと言うかイカやらタコやらが海中で墨を吐いたみたいな感じだ。

その黒い闇は徐々に大きくなり、レイの背丈と同じぐらいにまで膨張した。

レイは恐怖のあまり、すでにカチンコチンに固まって息すらしていなかった。

そしてその黒い闇らしき物がやっと聞き取れるような小さなくぐもった声でこうつぶやいた。

「オキテ……破ったね……」

その闇はゆっくりと何か人のような動物のような、何らかの形になろうとモワモワと変形を始めた。

「出たぁ!!」――――

恐怖の絶頂に達していたレイは目を固く閉じ床に土下座しながら、汗でぐっしょりな手を合わせ「ナンマンダブ、ナンマンダム、エロイムエッサイム、ごめんなさい！　ごめんなさい！　ごめんなさい！」と取り乱した様子で目の前の得体の知れない闇に向かってひたすら謝りつづけた。

一体どのくらい、しどろもどろになりながら謝っていたのかわからない。生きている心地が

しないというのは今体験している、この異常な状況を差し置いて他にありえないだろう。
そして、暫くの沈黙の後、人生史上最悪のショータイムに似つかわしくない、やけにすっとぼけた声が、柔らかいゴムボールがコロンと転がり入ってくるようなお気軽さで話しかけてきた。
「も〜いいから、レイ、ゆっくり目を開けてこっち見てよ。でも、びっくりしないでね。」
「ナンマンダム、エロイムエッサイム、お願いです！　殺さないで！　取り憑かないで！　お釈迦様、イエス様！」
レイはまだ固く目を閉じ身体をガタガタ震わせながら、ブツブツと手当たり次第思いついた言葉を唱えながら謝罪をつづけている。
「だ〜か〜ら〜、もういいって目開けてよ！」
やけにフレンドリーな語調にレイは歯をガチガチ鳴らしながら、ゆっくり恐る恐る目を開けた。
「えっ!?　猫!?　チャコ!?」
目の前にいたのは数年前に死んだはずの、ペットの黒猫、チャコだった。
左右の目の色が違う所もそのままだ。直感でチャコとは理解したが、でもレイの可愛いチャコとは明らかに様子が違う。
顔はまさにチャコそのものなのだが身体のバランスは人間っぽく手足の形も人間っぽかった。頭の中が超高速で混乱するなか、恐る恐る目の前のチャコと思わしき存在に訪ねてみた。
「チャコ……なの？」
その存在が拍子抜けするような、お気軽なトーンで答えた。
「そうだよ。ひっさしぶりぃ〜！　ビックリした？」
「マジ!?　マジでチャコなの!?　コックリさんって、チャコだったの!?　――つーかなんでココにいんのよ!?　なんで喋ってんのよ!?」
「そうだよ、チャコだって言ってんじゃん。　そんなこといいから、バンドやろうよ！　バンドやりたいんだろ？」
「でもアンタ猫じゃん、つ……つーかアンタ死んでるじゃん！」
「細かいこと言わないの」
「いや、全然細かくないって！」
チャコはレイが可愛がっていたオッドアイのメスの黒猫である。黒と言っても完全な黒ではなく濃いグレーの雑種の猫だ。
昔、小学校の帰り道でレイについてきた野良猫で、最初は家までついてきては、ちょこっとエサをいただい後どこかへ消えていくという感じだったのだが、毎日毎日それを繰り返すうちに、とうとう居座ってしまったという図々しいヤツである。
名前の由来は黒いから、墨――炭――charcoal――チャコ、というチャコには申し訳ないぐ

らい適当なものだ。
そのチャコがひょんなことからアッチの世界から帰ってきたのである。
いかにオカルト好きのレイでも、この常識では考えられない超常現象にはかなり戸惑った。
怖い話は大好きだが、その当事者になるのはカンベンしてほしかったのだ。
そう、レイは何を隠そう、とても恐がり屋さんなのだ。
「くー……かー……、くー……かー……」
――は？　寝息？――
レイがちょっとの間、記憶を呼び起こしている隙にチャコと思わしき化け猫は眠りに落ちたようだ。レイのベットでごく当たり前のように丸くなって眠りこけている化け猫チャコを尻目にしながら、自分も眠りにつく準備に取りかかった。
「つーか、なんで化け猫がアタシのベットで寝てんのよ……もう、布団まで勝手に使っちゃって……」
グチをこぼしながら、ベットのすぐ横の床にお気に入りの蜘蛛の巣模様のクッションをまくらにし、椅子に引っ掛けてあったズタボロでパッチやら落書きやらでパンクテイスト満載のGジャンを布団代わりに掛けて横になった。
「でも、チャコと再会できたのは素直にうれしいから、今日のところはこれでOKということにしよう……」

もうそれ以上何も考えず、レイはひとまず眠ることにした。
――というか、疲れすぎてこれ以上何かを考える気力を持ち合わせてはいなかった。
コックリさんでの失敗からチャコと再会。
驚きと不安、とまどいが渦巻く訳の分からない展開の中でバンド結成を決意する……というより、ノリで決意させられようとしていた。